

ロシア語形容詞語尾の変遷に関する仮説

京都大学大学院博士課程

京都大学大学院教育支援機構奨励研究員

水野庄吾

efforts.0213@gmail.com

本発表の流れ

本発表の目的は、複雑に入り組んだロシア語の形容詞語尾の歴史的な機能変遷に着目し、それら変遷を統一的かつ一貫的に説明する規則は存在しないかという問いに対する仮説を提示することである。

ロシア語形容詞には、長語尾形と短語尾形の2種類の語尾を持つものがある。これら2つの語尾が持つ機能は様々な歴史的な変遷を遂げてきた。

このような変遷に関して、先行研究は、主に形容詞や名詞の定性（不定性）の観点から説明してきた。しかしながら、これらはロシア語形容詞の語尾で起こった種々の変遷に関して、統一的な説明を与えているとは言い難い。

したがって本発表では、Shibatani & Shigeno (2013) や柴谷（2021）で提案されている体言化理論による動的機能類型論の観点から、ロシア語形容詞語尾の変遷を考察することで、これは、動的機能類型論が示唆するように、話し手のエコノミー、聞き手のエコノミーという一貫した規則で統一的に説明され得るという仮説を提示する。

本発表の分析対象①（現代ロシア語の形容詞）

ロシア語の形容詞には、以下の (1) のように長語尾形と短語尾形を持つものがある（主に性質形容詞）。

(1) 短語尾形	krasiv-Ø	krasiv-a	krasiv-o
	beautiful-M	beautiful-F	beautiful-N
長語尾形	krasiv-yj	krasiv-aja	krasiv-oe
	beautiful-M	beautiful-F	beautiful-N

長語尾形は短語尾形に承前代名詞を付与することで派生したものであるなど、両者は歴史的に関連し合って、現代語に至るまで、変遷を遂げてきた（5ページ参照）。

本発表の分析対象②（現代ロシア語の形容詞）

現代ロシア語の形容詞は，以下の (2) のように，短語尾形は性・数という文法範疇を有し，述語用法しか持たないのに対し，長語尾形は性・数・格という文法範疇を有し，述語用法，名詞修飾用法，名詞句用法を持つ。

(2) 長語尾形			短語尾形		
述語用法	On	dobr-yj	述語用法	On	dobr-Ø
	he	kind-M.SG.NOM		he	kind-M.SG
	‘He is kind.’			‘He is kind.’	
修飾用法	doby-yj	mal’čik			
	kind-M.SG.NOM	boy.M			
	‘a kind boy’				
名詞句用法	Vs-ego	dobr-ogo!			
	all-M.SG.GEN	kind-M.SG.GEN			
	‘All the best!’				

本発表の分析対象③（歴史的事実）

ロシア語形容詞の2種類の語尾は、当然のことながら、歴史的に相関しながら、現代語に至るまで変遷してきた。具体的には、以下のような事実が知られている。

- 長語尾形は、短語尾形に承前代名詞を付与することで派生した。
- 短語尾形は、長語尾形と同様に格変化を有し、修飾用法を持っていたが、これらを歴史的に失ってきた（Ivanov 1983）。
- 短語尾形は、名詞句用法を持っていたと示唆される例がある（Bartszewicz et al. 1988）。
- 長語尾形は、元来、修飾用法のみを有し、述語用法は持っていなかった（石田 1996）。

→短語尾形：格変化，修飾用法，名詞句用法の消失；長語尾形：述語用法の獲得という変化を遂げた。

先行研究

ロシア語の形容詞語尾の差異に関する研究としては、多くのものがある。具体的には、形容詞の持つ定性（不定性）に着目したもの（e.g., Tolstoj 1957; Flier 1974; Larsen 2006）や形容詞の被修飾名詞の定性（不定性）に着目したもの（e.g., Jakubinskij 1953），また語尾の間に意味の差はないとするもの（e.g., Borkovskij 1978）などがあり，統一的な見解が得られているとはいえない。

また，短語尾形の格変化，修飾用法の消失の理由に関しても，これらと同じように定性（不定性）に着目した説明がある。Ivanov (1983: 307-308) は，短語尾形の格変化，修飾用法の消失の理由として，短語尾形と長語尾形が持つ定性の重複を挙げている。具体的には，長語尾形は定性を表したのに対して，短語尾形は定性・不定性に中立的であったために，本来，定性を表す必要がある修飾用法としては長語尾形が短語尾形を凌駕した，また述語としては定性を表す必要がないため，短語尾形は述語専用形となったというような説明である。

先行研究の問題点

Ivanov (1983) の説明は、確かに短語尾形の格変化・修飾用法の消失の理由としては有効かもしれない。しかしながら、定性を表す必要がないため、短語尾形は述語用法専用形になったという説明と長語尾形が述語用法を獲得したという事実はむしろ矛盾する。

また、仮に短語尾形が不定性、長語尾形が定性を表していたとすれば、これは短語尾形の格変化・修飾用法の消失の理由とはならないだろう。定性・不定性というように役割分担がはっきりとしているのであれば、むしろ両方が残るべきである。これは多くの言語で不定冠詞、定冠詞を残しているという事実からも窺える。

さらに、ロシア語では動詞のアスペクトなどの他の範疇が定性（不定性）を表しうるため、形容詞では、表す必要がなくなったというような意見もある（see. 清水 2018）ようだが、それならば、そもそも短語尾形から長語尾形を発達させる必要はないと考えられる。

本発表の研究設問・研究目的

本発表の目的は、

- ①複雑に入り組んだロシア語形容詞の歴史的な機能変遷について統一的な説明を与える規則はないか？
- ②現代ロシア語に至るまでの変遷過程を一筋で説明できないか？
- ③それは一体どんな規則でどんな過程を経てきたのか？

という問いに対する仮説を提示することである。

新たな観点の導入

上述したようなロシア語形容詞語尾の様々な歴史的な変遷は、それぞれが決して無関係なものではないように思われる。つまり、様々なロシア語形容詞語尾の変遷の過程は統一的に説明されるべきである。そこで本発表では、柴谷（2021a ; 2021b）などで提唱されている体言化理論による動的機能類型論からの考察を試みる。

体言化理論①

体言化理論とは、ロシア語などの文法性の標示（以下では性標示）は体言化の機能を有するというものである。ロシア語の形容詞は長語尾形、短語尾形ともに性標示を持つため、体言化理論によれば、体言（名詞）に準じる構造、すなわち**準体言**として機能する。したがって、名詞が持つ名詞句用法、述語用法を持つことが期待され、事実、長語尾形はこれをもつと考えることができる（(2) 参照）。

つまり固有の性を持つ名詞と固有の性は持たないが、性標示によって体言化された形容詞は、共に文法性という範疇を持ち、体言（名詞）の名の下で統一的に捉えられる。

体言化理論②

体言化理論のメリットとして、**修飾用法を持たない形容詞**を正確に捉えることができるということがある。体言化理論では、性標示の生起は名詞句用法から始まると考えられている。これは、従来のような、形容詞は名詞を修飾するものである（Russkaja grammatika 1980: 540 etc.）や形容詞の性標示は主名詞に一致するものである（Corbett 1982: 198）というようなものとは大きく異なるものである。このように捉えることは、以下の (3) のような、従来のロシア語学では、形容詞（分詞）と捉えることを妨げないが、名詞句用法しか持たない性標示を的確に捉えることができる。

(3) zapjat-aja (*točka)

 comma-F (*dot)

つまり、形容詞を始めとした性標示を持つ要素は、名詞句用法を基本とするということを意味する。

動的機能類型論①

柴谷（2021a: 496）では、数多くの言語の性標示・類別詞の分布パターンを名詞句用法，修飾用法という機能との関わりという観点から考察することで，以下の図1ように纏めている。

	名詞句用法	修飾用法
(i)	OPT	NO
(ii)	OPT	OPT
(iii)	YES	NO
(iv)	YES	OPT
(v)	YES	YES

(OPT＝随意的，YES＝義務的，NO＝標示不可)

図1 性標示・類別詞の分布パターン（柴谷 2021a: 496）

動的機能類型論②

従来のような形容詞は名詞を修飾するものというような分析は、図1（再掲）の (v) の修飾用法の形式を出発点に定義付けを行い、名詞句用法に関しては、主名詞の省略などの分析が行われてきたのに対して、動的機能類型論は (i) を出発点とし、他の分布パターンは (i) から歴史的に発達したと考えることができる。そしてこれは、(v) のような名詞句用法、修飾用法で均一になった状態から新たな形式をさらに名詞句用法で発達させ、(i) に帰り、再び歴史的発達をしていくことを予測する（柴谷 2021a: 497）。

	名詞句用法	修飾用法
(i)	OPT	NO
(ii)	OPT	OPT
(iii)	YES	NO
(iv)	YES	OPT
(v)	YES	YES

(OPT＝随意的，YES＝義務的，NO＝標示不可)

図1 性標示・類別詞の分布パターン（柴谷 2021a: 496）

なぜ変化や発達は起こるのか？

このような用法や機能と形式との間で変化や発達が起こる理由として、柴谷 (2021b) では、話し手のエコノミーと聞き手のエコノミーが挙げられている。話し手のエコノミーとは、同一形式で、すなわち極力、簡単に様々なことを表したいという話者の要求、聞き手のエコノミーとは、用法の違いに合わせて、形式を変えたいという聴者の要求、というように、Martinet (1962) が想定するような機能主義言語学の立場が想定されている。

ロシア語の形容詞語尾の変遷も同じように説明できないか？

動的機能類型論によるロシア語形容詞語尾の分析①

ロシア語の形容詞短語尾形は属性語幹に性標示を持つ語尾を付与したものである。したがって、動的機能類型論によれば、これはまず名詞句用法を持つ。そして、(a) 名詞句用法から出発した形容詞短語尾形は話し手のエコノミーによって修飾用法も持つようになる。さらに、(b) 聞き手のエコノミーから修飾用法で新たな形式（長語尾形）を生む。長語尾形は元々、修飾用法専用形であったことから短語尾形の修飾用法は不要となる。(c) 話し手のエコノミーから長語尾形も名詞句用法を持つようになる。(d) 聞き手のエコノミーから短語尾形の名詞句用法も述語用法を除いて衰退する。

※述語用法に関しては体言化理論では詳しく扱われておらず、検討する必要があるが、発表者は名詞句用法の下位範疇として存在すると考えている。

動的機能類型論によるロシア語形容詞語尾の分析②

これを纏めると以下の図2のようになる。

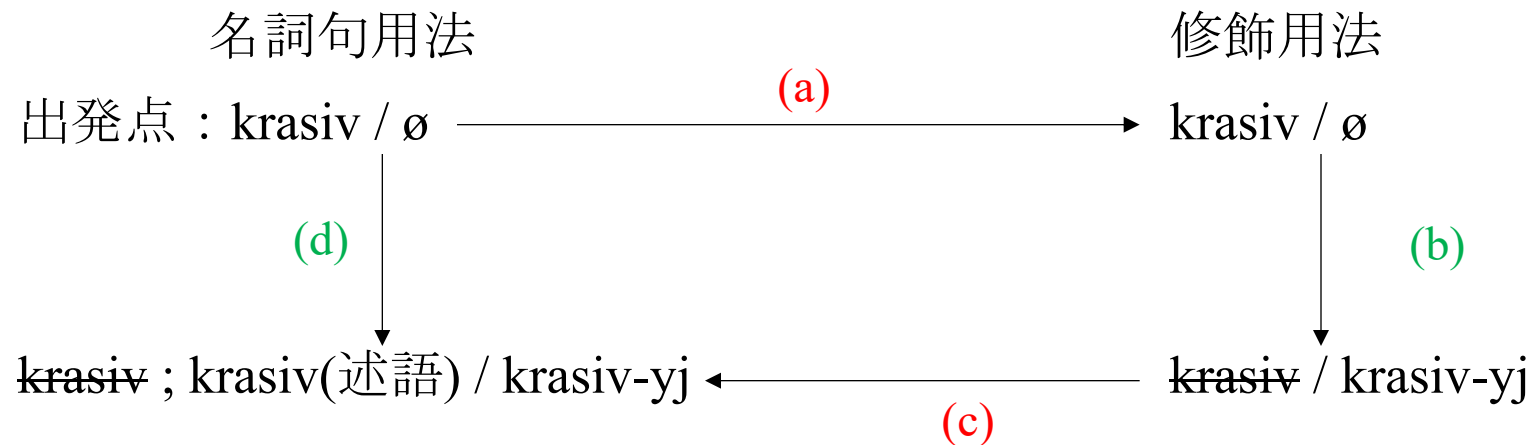


図2 話し手のエコノミーと聞き手のエコノミーによる形容詞語尾変遷の仮説
(ここでは短語尾形 : krasiv; 長語尾形 : krasiv-yj を例とする)

所有詞の変化

図2のような仮説は、近年ロシア語の口語で使われるようになってきている所有詞の新たな形式（e.g., *evonn-yj* ‘his-M’; *ixnj-ij* ‘their-M’）の発生の説明を可能にする。

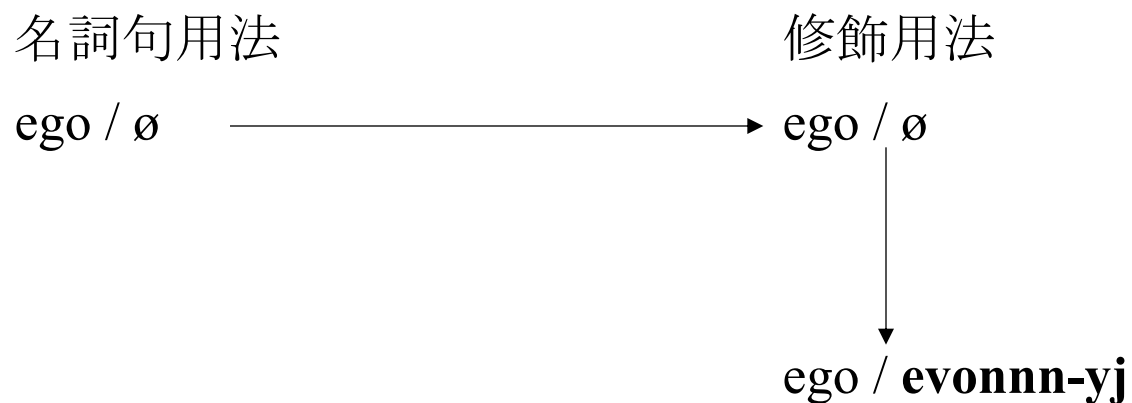


図3 所有詞 *evonn-yj* の発生

結論

以上のように、本発表では、現代語に至るまでに様々な変遷を遂げてきたロシア語形容詞語尾に関して、その変遷の過程を体言化理論による動的機能類型論の観点から考察することで、（話し手/聞き手の）エコノミーという規則による説明ができるという仮説を提案した。

従来の先行研究は、形容詞語尾の変遷過程について、統一的かつ一貫した説明を与えてこなかったのに対し、本発表の仮説は統一的かつ一貫して変遷の過程を説明することができることから、より説得力のあるものであると考えられる。また、本発表で与えた仮説は、近年ロシア語で確認される所有詞の新形式の発生を予測することのできるものである。

残された研究課題

図2で示した通り，話し手のエコノミー，聞き手のエコノミーという統一的な規則によって，ロシア語形容詞語尾の変遷の過程は一筋に説明することができる可能性がある。しかし当然のことながら，動的機能類型論による分析がロシア語形容詞語尾の変遷の全てをうまく説明するわけではない。残された課題は，以下の通りである。

現在の定説によれば，形容詞の長語尾形は，修飾用法専用形として現れたものであるとされている。しかしながら，これは動的機能類型論が想定する性標示の新たな形式は名詞句用法から始まるというものとは異なるものである。これについては，引き続き検討していく必要である。